僕の手が紡ぐ物語

御園　杏梨

昔、人間は突然不老不死になりました。何百年前の出来事かもよく分かりません。成長期にある子供の成長は止まらなかったので、ほぼ全世界の人類の老いが止まってしまった事にしばらくの間誰も気付かなかったのです。皆がそれに気付いた後も、政府や学者はこのあまりにも奇妙な現象を簡単には認めようとしませんでした。一年近く経ったある日、ようやくある国の政府が認める

と、それに追随するように殆どの国が次々とこの事実を認めました。その後研究が本格的に始まりましたが、原因は今でも不明です。

常識では考えられない異常事態にも関わらず、人間は皆喜びました。その当時、彼らが一番恐れていたのは『死』だったからです。それ以来、生まれてきた子供達は皆二十歳前後で成長が止まるようになりました。

しばらく経つと一つ困ったことが起き始めました。人口が増えすぎて、人が住める陸地がなくなってしまった

のです。勿論前々からこうなることは予測出来ていたのですが、対応が遅すぎて間に合わなかったようです。そこで偉い人達は、役に立たない人々を海に捨てることにしました。真っ先に選ばれたのは、この現象が起こった時には既に高齢だった人達でした。若く健康な体を持った人間が増えたので、体が悪く体力もないお年寄りは邪魔者扱いされたのです。次に病気にかかった人間が次々と捨てられました。そのうち、生きることに疲れた人達が進んで海に飛び込むようにもなりました。

しかし彼らは死にませんでした。否、泳ぐことが出来

ず水底で溺れようと、食べる物がなく骨と皮だけの体になろうと、死ねなかったのです。海を覗けば、皮膚だけがふやけて膨れ上がった、最早人間の形を保っていないものがうようよ泳ぎ、或いは沈んだままもがいていました。人間が、恐らく初めて『死ねない』ということに恐怖を抱いた瞬間でした。

それでもこの制度は続きました。僕が思うに、他に良い案がなかったのだと思います。この頃には殆ど人口増加は止まっていましたが、それでも狭いことには変わりないのです。

それから何十年も時が過ぎ、今度は別の問題が生まれました。食べ物が足りなくなったのです。人間はこれまで保護してきた生き物だろうが、毒物だろうが何でも食べました。味のことを考える余裕など、誰にも残ってはいませんでした。中毒症状など、誰も気にしませんでした。どれほど苦しかろうと、どうせ死ぬことはないのです。

たった十年程度で人間以外の動物は全て絶滅し、植物も食べ尽くしました。世界中の人間が今まで経験したこ

とのないような飢餓に襲われました。でも、苦しいだけ。そのまま死ぬことは許されないのです。

「こんなに苦しいのなら死んだ方がましだ」

恐らく誰もがそう思いました。各国政府も必死になって死ぬ方法を模索しました。しかしそれも無駄でした。不老不死になってしまった人間は、仮に骨だけの姿になっても死ねないのです。動くことこそありませんが、骨の一本一本が皮膚呼吸の真似事を始め、その表面は平熱

を保ちました。不思議なことに、どの位置に脳波計を付けても脳波を感知することすら出来ました。

そんな中、この現象が起きた当初から研究を続けてきた学者達が、記者会見を開きました。この現状にいい加減疲れ果てていた人々は、打開策を期待して液晶の前に釘付けになりました。世界中の人間が見つめる中、その研究チームが発表したのは、これ以上なく単純に絶望的な事実でした。

「細胞が一つでも残っている場合、そこには意志が宿り生命活動を続行します」

「体を細切れにしたとしても、それぞれの部位全てに元の体の記憶を引き継いだ人格が存在することとなります」

この事実はあっと言う間に知れ渡りました。誰もが死ぬことを諦めました。こうして人間は、出来るだけ苦痛を感じないように生きるだけの生物にまで退化したのです。

そんな様子を、僕らはずっと見つめていました。僕はこの現象が起きた当初、正確には分からないのですが、恐らく十八歳で成長が止まりました。少なくともこの現象に気付いた時、僕はまだ高校生でした。

その僕の隣には、いつもある少女がいました。彼女は僕より一つ年下の幼馴染で、現象が起こってから百年が経とうとしたある日、突如両親が発狂して以来、僕と一緒に暮らしていた人です。僕は彼女を実の妹のように可愛がっていましたし、彼女も僕を実の兄のように慕って

いたように思います。少なくとも僕は、彼女に一度も恋慕の情を抱いたことはありませんでした。

「ねえ、何で私達、あんなに『生きること』に執着してたのかな」

彼女が、呟くように言いました。僕は彼女の手を強く握って答えました。

「……長生きできたら、もっと面白いこと、素晴らしいことが出来るって思ってたからじゃないのかな。実際は違ったけど。人間が出来ることには限界がある。それを僕らは知らなかったんだよ」

「あのね、私、これは罰なんじゃないのかなって、時々思うの。人間って、ずっとずっと他の生物を必要以上に殺して、自然を破壊し続けていたでしょ？　そうやって自然の摂理をねじ曲げちゃったから、今こうやって苦しんでるのかなって」

僕は無言で、ただ首を縦に振ります。彼女は苦しげな表情で続けました。

「でも、私って自分勝手だよね。自分が悪いって分かっててもそれでも苦しみたくないなって思っちゃうの」

「当然だよ、僕だってそうだ。じゃないと、今日わざわ

ざこんなところに来てるわけがない」

僕はそう言って、ぐるりと辺りを見回しました。昔は研究所だった、荒れ果てた建物。今では知っている人も少ない、かつて三度も行われた激しい戦争の副産物。僕らはその場所に来ていました。

「ここにある爆弾を爆発させれば、地球は一瞬で滅びる。人間なんて、跡形もなく吹っ飛んじゃうんだよ」

「つまり、本当に死ねるのね……」

彼女の声には、どこか期待しているような響きがありました。

「じゃあ、そろそろ終わろうか」
僕らの人生も、人間そのものの歴史も、全部。
「うん、そうね」
彼女は嬉しそうににっこり微笑みました。
そして僕らはゆっくりと、かつて『核』と呼ばれていた爆弾のスイッチに手を伸ばしましたーーーー。

意識が戻った時、僕は何も見えず、何も聞こえない空間にいました。僕は彼女に呼びかけようとしましたが、声が出ません。手探りで彼女を捜そうとしましたが、体

の動き方に酷い違和感があります。

そこまで来て初めて、僕は自分が死んでないことに気付きました。体のどこかが吹き飛び損ねたのです。彼女がどうなったのか知りたいのですが、眼も耳も口も消えてしまったのか、彼女のことはおろか自分が今どんな状況なのかすら分かりません。僕は仕方なく、体をがむしやらに動かして移動することにしました。もっともしばらく経てば、動き方のコツを覚えて自由に歩き回ることが出来るようになったのですが。

それでも誰もいない空間でただひたすらもがき続ける

のは、僕の人生の中で最も辛い期間でした。何より語り合い、触れ合う相手がいないのが堪えました。この時僕は、今までどれほど彼女に救われていたのか気付いたのです。

そうして辛い日々を闇雲に彷徨い続け、先日、ここで初めてアスファルト以外の物を発見しました。全身を駆使して調べてみた結果、どうやら紙とペンであることが分かりました。試しにそれを四苦八苦して握ってみた時、何故か妙に覚えのある感覚がしたのです。それが何故な

のか気付いた瞬間、僕は全てを理解してぞっとしました。

僕は『手』になっていたのです。何の比喩でもなく、文字通り右手のみの存在となって生き永らえていたのです。右手は利き手だったので、僕はかれこれ二、三百年はペンを握る感覚に慣れ親しんでいたのでした。

考えた末、僕はその紙に僕達人間が、この惑星がどうしてこうなってしまったのかを書くことにしました。それがこれです。もっとも僕はこの紙が見えていないので、

他の人が読める字が書けているのか今でも不安ですが。

僕はもう、長い間一人で歩き続けました。しばらくはここで、誰かが来るのを待ちたいと思います。これを読んでくださった貴方、この紙の上に干からびたような手が転がっていると思います。それが僕です。気付いた方がいらっしゃれば、僕に触れて教えてください。僕を孤独から救い出してください。僕をこの生き地獄から助けてください。お願いします。どうかお願いしま

〈了〉